

談叢家業實

にありざれば能くせざる所也

先づ名を現はし、而して後形を現はす、機を

しに思ふ所圖に當り、大丸屋の呉服として其評判甚と高うりければ、是より屢々往來して、遂に支店と設くるに至りけり。

(115) 其二

大丸屋數必らず
しも山師ならず

大丸屋正右衛門己に本店と京都府開き、名古屋に支店と出したれば、更に又江戸に出店せんと欲し、先づ印と染抜きたる萌黄地の大丸屋數萬枚と製し携へて江戸に出で、知己の許と尋ねて祖先年回の志なりとて之と贈り、又知己の手と借りて之と諸方へ頒ちしるば、人々便利なりとて之と用ひける中に、自づと大丸屋の名は至る所に傳はりける。正右衛門は此機と外さず、江戸の旅籠町に店と出し、暖簾と掲げしるば、大丸屋の名益々高くして、恰も永年賣込みたる老舗の如く、頗る繁昌しけるとなん。今東京にて越後屋と并び呉服屋の親玉と仰がるもの即ち是なり。

談叢家業實

德行を商略か行ふもの

(116) 其三

さころ
あちめ

大丸屋正右衛門己に豪富と致し、京都に隠居して正啓と號す。是より専ら隱徳と施し、常に自ら金と懐にして市中と廻り、貧民と見れば即ち之と恵み、而して曾つて其名と示さず、之と久ふして人皆正啓の所業たるを知り、其徳に感じ、其恩と思ひ、大丸屋の名愈々高うりければ、貧民の其子弟と養ふと能はざる者は、争ひ來つて奉公とぞ望みける。正啓さこそと打笑みつゝ、多々益々之と養ひて、丁稚とし、次第お手代番頭と上せ使ひければ、彼等は素より三界家なきの徒、殊に子餌のとなれば、主家と以て已れの家と心得、忠勤と拔き、んで、臨みけるにぞ、店の繁昌彌が上にも彌増し、又其老功者に、暖簾と分ち別家せしむるに及びて、枝葉倍々繁りて、根幹彌々堅く、遂に千載動るべからざるの基礎と造りしとぞ。

談叢家業實

國體 ◎守田治兵衛(一)(二)

(117) 守田治兵衛

露のなき
どろぼう

文久二年江戸に流行病あり、コロリと唱へて其流行殊に烈しうりけるが、偶々守田治兵衛の店の一の處方書と持ち來り調劑と乞ふものありけり、治兵衛之と見るに藥種八味にして、尋常用ふるものにあらざりければ、或は奇藥にてもあらんと、病に其處方書と寫し取り、深く自ら研究して其コロリにも利目あるべしと思ひたれば、試みに之と調劑して「コロリ豫防藥」と名づけ賣出せしに、果して効驗のありけるにや、非常に賣れければ、是より益々其製方と改良し、寶丹と名つけて賣出し、遂に百萬の富と得たりける。

(118) 其二

現に余は
現に余は

或は傳ふ、始め守田治兵衛の寶丹と賣るや、先づ自ら姿と變じて市中の

談叢家業實

此人に會ふ
て始め賣
丹の効あり
寶丹は賣り
かななる

果して神
守りて神
神田の稱
て託其子孫
の榮と謀ら
るにあらざる

各所を廻り、到る所「守田氏の寶丹は、實に起死回生の妙藥なり、現に余は寶丹に依りてコロリの災を免れたり」なを頻りに風聽せしかば、是より非常に賣れたるなりと、事の眞偽未だ知るべからずと雖も、守田が寶丹賣の弘めに力を盡したる事は、彼の新聞の廣告と云ひ、効能書と云ひ、皆な他の賣藥に先ちて一新機軸を現はしたるを見て知るべし、又其藥を諸方へ寄附寄贈して其名を弘めたるが如きも、亦た他の賣藥に先立つ所にして、殊に之を外國にまで賣弘めたるが如き、以て其機軸の一斑を見るべし。

(119) 其三

是が私の
お妾です

守田治兵衛已に富を作る。一日其信仰する所の不忍辨天に詣ふで、家に歸つて直に其子を呼び、云ふて曰く「今日神託あり、汝に家督を命せらる」と、即日隠居して家督を其子に譲る、其事勿卒にして人皆な之に驚く、今

機軸 ◎守田治兵衛(三)

談叢家業實

守田翁の廣
告に力む一
に愛に至る

の治兵衛即神託に依り父の業を継ぎ能く名望を保つ。

寶丹翁常に質素を守り風流を喜ぶ然れども時とえて又酒樓に遊ぶ事あり或は云ふ是れ寶丹廣告の爲めなりと。翁一日數寄屋町の一茶亭に遊び多く歌妓を招き而して尙ほ不満の色あり妓其故を問ふ翁の曰く「皆さんには失禮ですか私のお妾を呼びたいものです」と妓皆な竊に驚きて思らく謙直の老翁何時の間にか妾を蓄へけるぞと即ち之を招がん事を勸む翁喜びて即ち使を出せば忽ち一小函の來るあり翁直ちに其蓋を開けば中に一の美女あり人形なり翁の曰く「是が私のお妾です、どうぞ御近づきに願ひます」と妓皆な翁の言の眞面目なるに驚く翁更に人形を取り之に云ふて曰く「姉さん達に御盃をお上げ」と人形の機軸自ら動きて杯を進む妓皆な其巧妙に驚く翁更に函底より許多の寶丹其他の賣品を出し妓に與へて曰く「是は此妾からのお土産です」と妓又驚く。

機軸 ◎守田治兵衛(三)

談叢家業實

竹崎翁は今
喜ぶ所小兒
は外國に近
し外國に於
ては外も
厚紙にして
行を摸して
其又文吉の
購は云ふべ

機軸は二端
より穿し

(120) 五十嵐文吉

奇蹟か
神童か

五十嵐文吉は紀伊國屋文左衛門の幼名也。紀州熊野浦に生る家は素と貧しければ艱難の中に育ちけるが七歳の時父が向ひ「余れ錢儲けと編出したれば錢五十文貰ひたし」と云ふに父は又しても不用事とと咥さつゝ五十文の錢と與へ「手弄るぞすな」と笑ひける。斯くて文吉は何所より竿竹一本買來り脊戸の日陰へ籠と敷き小刀おて其竹と幅五分長さ五六寸程に切り其兩端へ風切と付け團子串位に削つりたる竹と其真中へ嵌め込みつゝ手にて廻はし空へ上げ之と手遊轉始と名づけ其日より近所の在々町々と賣行さけるに此は珍らしくて價も安しとて凡そ二百本程賣れたれば僅ら五十文の元手にて一貫文足らずの利を得たれば是より毎日斯くすると三四十日にして許多の黄金と得たれば「活計の助けにあされよ」とて兩親へ残らず渡し置き「尙ほ此外にも

機軸 ◎五十嵐文吉(一)

談叢家業實

機懸 〇五十嵐文吉(二) 一七六
工夫あり」と語りければ兩親始め大に驚き七歳の小兒の梁とは懸はぬ
者も多ありける。

(121) 其二

佛を玉に 遍手で環

文吉は斯くて數年の間は、父母も孝養と盡し其學れ高ありけるが、廿歳
の頃フト病氣に罹り、尙ほ其上に發狂なし、晝夜と分たす有らぬ事をも
言ひ罵り「嗟哉清涼寺の釋迦尊來れり、難有や、尊や、尊や、近きに精舎へ登
山みし報恩となさんのみ」と云ふると思へば高野に、兩親も殆々持て餘
ましけるが、或夜文吉はムツと起き、兩親と枕邊近く指招ぎ、言葉靜らに
語るやう「今夜暫らく目睡みしに、甚と尊き佛体の現はれ給ひ我れは山
城國清涼寺の本尊三國傳來の釋迦なり、汝が此度の疾病最も危くして
一朝一夕に治し難しと雖も、日頃の孝心も愛で三日の中に佛力と以て
治し遣はすべし、全快の後には我が佛地に來り一七日の參籠あるべし、其

談叢家業實

正文氣なり
正氣の正氣
阿観の正氣
限ならす

角つ鹿徒の
心と得るの
味り得るの
なり

時猶ほ幸福を與ふべし努々忘るゝ事なかれど、宜ふよと思へば忽へ夢
は覺め果てし心よくなりたり」と語る様は日頃に変る事なく全く正氣
なりしかば、兩親の喜び大方ならず、此夜よりして食事も進み、二日目に
は果して本復せまかば、是より急ぎて旅用を調ひ、許多の土産物を携へ
て嵯峨の清涼寺へと旅立けり。斯くて文吉は路すがら和歌山の城下
に立寄り、其豪商大黒屋庄左衛門を尋ねて何か打ち語らひ、夫より嵯峨
へ着し先づ清涼寺に至り、事の仔細を述べて一七日の參籠を願ひけれ
ば方丈も今更の如く釋迦尊の難有を思ひ、又文吉の志を感じ甚と叮嚀
に接待ければ、文吉は厚く其恩を謝し、携さへ來りし許多の土産物を所
化の人数に割合はして、残りなく與へ、些細なる布施物なりとて、差出し
ければ、方丈より以下、下男の果て迄も皆な文吉を奇篤の人よと賞め稱
へけり。斯くて一七日の參籠も首尾よく果たしけるが、文吉は方丈に
願ひけるやう「抑も當山の釋迦如來は世にも尊く在はす事、世界に知ら

實業叢談

世に其道
以てす
明く誰
も必らず
かる況や
利の僧徒
とや

一七八
○五十嵐文吉(二)
ぬ者もなし然るに此度私か靈夢に由つて斯くまで病氣平癒の神速な
りし其靈験の無量なるに聊か報恩なすと雖も普く之を世の人に知ら
せんものと思ふの餘り僱り多き事ながら我國和歌山の某寺へ遷座ま
し〜四十日の間開扉を願ひ奉つり有縁無縁の老弱男女に此御佛を
拜させたく私一人佛思を受けたればとて本意にあらざる切に願ひけ
れば方丈も其志を感じ心よく諾ひけり。斯くて文吉は一先づ和歌山
へ赴き彼の大黒屋庄左衛門に上首尾の趣を告げ之を金主に頼み尙も
開扉の手筈萬端を取極め已れは大黒屋より多くの金を受取りて嵯峨
へ引返へし愈々遷座の運びに受掛り方丈以下夫々へ又も許多の金を
贈りさて寺へは報恩料として日に一兩の割を以て寄進を爲し仕度も
已に整へければ役僧を先きに立て群がる老弱男女と共に御佛を守護
し和歌山指してぞ出でにける。聽て和歌山に入佛あれば大黒屋は許
多の講中を組立て勇ましく御出迎へに出で兼ねて定め置きける寺院

實業叢談

世に此二の
舞を爲す
の甚だ多し
而して及ば
ず文吉に及ば

へ遷座し參せら「開帳」の札高く掲げしかば嵯峨の釋迦如來の他國に
て開扉あるは始めての事にもあり兼ねて文吉の靈夢の事とも一時高
かりし事なれば近郷近國は素より遠き國々よりも普男善女の集ひ來
るもの幾萬人と云ふ數を知らず和歌山開市以來の賑ひなれば諸國の
商人角力芝居見せ物師放歌師などは争ふて我も〜と寺内の場所を
望みければ文吉は價を定めて之を貸し又掛茶屋などは株を定めて賣
買する事となりければ其収入夥しく四十日の間に諸入費を差引き正
味二萬五千兩の金を集め大黒屋は金主の事なればとて一萬五千兩を
取り文吉は一萬兩を受取りて故郷へ歸へり父母に其由を語りければ
父母は夢に夢見し心地して夫は〜と許りにて喜び大方ならざりけ
る。

(12)

漁師八右衛門

我は是れ母娘の
靈なるぞや

機懸 ◎漁師八右衛門

談叢家業實

捕傷の器什
右衛門は他日
の資本。

一八〇 漁師八右衛門

紀州の海鯨を捕ふ事最と盛なりしが、初め唯兒鯨を捕へ母鯨をば顧み
ざりけるに、母鯨は兒を守りて容易に人手に繋らず、捕獲の數、日に減じ
て漁民皆な之を憂ひけり。八右衛門即ち衆に云つて曰く「我れ將に一
工夫を試みん」と夜具を被つて臥す事數日の後、遽かに躍り起き、一刀を
閃めかして妻子を殺さんと狂ひ廻はりければ、家内の者共驚きて逃げ
廻はりけり、八右衛門は何はも狂ふて衣服調度手に觸るゝ物は皆引裂
き打毀はし、一として満足なるものなかりし程に、近所合壁の人々之を
聞き驚き來つて刀を奪ひ去るゝ。卷にぞ縛りける。さて近所の人々
は之を縛りはまたれども、正しく物の怪の付きたるものならんとて、太
く之を縛れみ僧徒、神主、さては巫師などを招ぎ祈禱せしめけるに、狂人
は又もムクと起き上り、甚と奇妙なる聲にて諸人を睨まへ「我れは是れ
母鯨の靈なるぞや、元來紀州は殺物不足なれば、鯨を取つて食用を食く
る事是れ熊野權現の神意に出づる所なり、然るに汝は之を知らず抑も

談叢家業實

五十嵐文吉
の巨量に托
して作られた
富と比すれ
ば更に味あり

母鯨の老いて宿業已に満つるものは人に食はれて以て罪業を消滅せ
る事理の當然なり、然るに宿業未だ満たざる兒鯨を捕へて之を殺さば
罪業いつの程にか消滅せんや、汝八右衛門此道理を辨へずして専ら兒
鯨を捕へんとぞ、我れ必き八右衛門及び同村の漁師を一人も殘さざ七
日の間に誅罰せん」とて確と睨まへたる其恐ろしさ實に母鯨の神靈な
るかと思はれたり。之を聞く諸人は恐ろしさに堪へ兼ね「何と加して
我等の罪を宥させ給へ」と祈りければ八右衛門は「然らば今より兒鯨を
捨て、母のみ捕ふべし、兒は長じて母とあるの目を待ちて之を捕ふべ
し、又鯨を捕ふ事十頭に至る毎に必き塚を築きて之を祭るべし、努々進
ふ事勿れ」と云へば諸人は一同に其言に従はんとぞ誓ひける。諸人の
誓ひ已に終れば、今まで血相變へたる狂人の八右衛門は遽かに病の癒
べたりけん、忽ち夢の醒めたる如く元の八右衛門に立返へりけり、是よ
り漁民は共に相戒めて兒鯨を捕らざり、母鯨のみ捕へければ永年の間、捨

一八一 漁師八右衛門

談 義 家 業 寶

一言先づ
賊の腹と違

て、頼みざりし母鯨のとどて一時に多くの漁獲ありければ、八右衛門は遂に富有の身となりしとぞなん。

(123) 季 鴻 章

いざ御案内
仕らん

東洋の大家傑大政治家大金満家と聞へたる支那の季鴻章は合肥と云ふ所の生れにして、幼少の頃は家も甚と貧しかりければ、同村の周理根とぞなん呼べる米屋に奉公しけり。此周理根は譜代の金満家にて金銀財寶數知れず貯へ、悉く之を石蔵に蔵め、蔵のそとには深き堀を廻らし用心甚と厳重なりけるが、或夜強盜十六人武器を携さへて周理根の家に忍び込みしに知るもの絶へてなかりけり、折しも季鴻章は廁に行かんとて外に出でけるに、盜賊等は得たりと之を取押へ金のある場所案内せよとぞ迫まりける。素氣の季鴻章なにとて之を怖るべき、忽ち一計を懸じ聲潜めて云ひけるは「さのみ騒ぐ事かは、君等は定めて鄧氏の

談 義 家 業 寶

軍曹愈々
賊の腹と違

手下なるべしと云へば、盜賊は不審の顔にて暫し見詰めて居りたりしが、季鴻章は其顔色を見て取り「我は日頃此家の主人が吝嗇にて我等を酷く逐廻し、その腹立しさに、君等の頭梁と談合して今夜此家の財寶を悉く奪ひ取り他國へ逃れて榮華を極めんと兼ねて手管も整ひたれば先程より密に君等の來るを待ちわびてぞ居りたるをれ」と語れば、盜賊等は益々不審に思ひ「吾々は鄧氏の手下にもあらず、又此小僧としめし合はしたる覺へもあられど、吾々を同類と思ふこそ物怪の仕合あり、さるにて此子僧の世にも稀なる大膽の惡徒あるとよ」と呆れつゝ「我々は如何にも鄧氏の手下なり、我が頭梁より兼ねて話に聞きたれども、さても汝の勇ましさよ、疾く案内せらるべし」と云ふをも待たせ、季鴻章は心の中に笑ひつゝ「御案内仕らん」と許りに彼等の先きに立ち橋を渡りて彼の石蔵に入り先づ自ら二つ三つの函を取り出し「是は帝王より賜はりたる珠玉の函あり、是は古代より傳はりたる金銀の

談叢家業實

二たび盗賊
と驚かす

此一事は
李氏の
人を知る
しり

函なり先づ各々方も手分けを爲し早く橋の上まで運ばるべし猶豫せば此賊を空にせざる中に夜の明くへしとせき立てつゝ已れも函を橋の上まで運ばんとて手早く携へたる燈火を橋上なる函へ移せば忽ち驟然一發天地も動く許りの爆聲を發し橋は見るく焼け落ちけり。此は結構と詰りたる。此大音に驚きて周理根は番頭始め大勢引連れ來て見れば出口を失ふて蔵の廻りにウロウロするは十六人の彼の盜賊にて手を揚げて「且那占めました」と呼はるは彼の李鴻章ありけり斯くて此盜賊をば難なく取押へさて李鴻章の物語を打ち開きたる周理根は其大膽と智謀に殆く感じ入り差當りの褒美として十萬兩をぞ與へける是れ李鴻章の十五歳の時なりしとぞ。

(124)

阿部市郎兵衛

其時分の
新發明

市郎兵衛は天保年間の人にして近江神崎郡能登川村の人あるが豫ね

談叢家業實

退ひて之を
守るは之を
益し其情動
意のみ

て理財の途に敏く又徳義の心厚かりけるが或時人に語りけるは凡そ家を富ますには二つの法あり一は家業を勵みて金を儲け一は退ひて之を守るあり是れ蓄財の法あり又金を儲けんとするものは鐵夫の如き思を爲すべし鐵夫は一塊の銅鐵を掘出そが爲めにも往々命を失ふ事あるなりと云ひしとか誠有味あるの言と言ふべし市郎兵衛は諸國に往復して全國を以て一個の店とあし或は奥羽の紅花を仕入れて之を丹後に賣り或は丹後の縮緬を仕入れて之を北越に賣り或は北越の米を買ひて之を北海道に送り或は北海道の肥料を買ひて之を故郷に販賣或は故郷の麻布を京坂地方に出そを其商機に敏なる事人の驚く程なりしが其頃は同村にては現金賣買のみ行はれしかば市郎兵衛は又延賣の法を創り三ヶ月乃至六ヶ月間客の望みに應じて利子を付けて販賣せしに人皆な之を便利に思ひて頗る顧客を増しければ市郎兵衛は之が爲めに三つの利益を得たりける其一つには買手の多き事

談叢家業實

其二つには金利を得る事其三つには賣買上の利益是を其頭にて於ては市郎兵衛の發明したる新法ありける。

機懸 阿部市郎兵衛(二)

(125) 其二

さては情婦の
数あることよ

市郎兵衛は旗本三枝氏の領民ありしが付て三枝氏の江戸表へ勤番に出でける折其供をぞ命せられける。然るに道中の宿々に至れば毎夜必らず姿を變へて密かに宿を抜出で何所へか行きければ三枝氏を始め供人等一同は最と訝しく思ひ「市郎兵衛は日頃謹直の人をれども近頃身代も目切富みたればさては少しく浮かれ出し毎夜遊興に出づるにやあらん」など言囃しけり。其後三枝氏は江戸に若し或日市郎兵衛を召して「汝は此度の道中に一夜として遊興に抜出ざる事なかりしがさては情婦の多き事よ」と笑ひつゝ打ち問へば市郎兵衛は莞爾と打笑み「さん候私の情婦は五十三次の宿々に五人六人と居らぬ所にて

談叢家業實

市郎兵衛好
言吐く奇
言又吐く
益し又吐
なり出づ
る才

は之れおく候なり私も久々にて江戸表へ出づるとにも候へば彼等會ひもし會はれもし且は江戸表の様子世間の模様なぞ探り置き度さては毎夜抜出で彼等を尋ね又宿場々の景況を見廻はり候ありさればこそ此度江戸表へ着勿々早くも一策を案じ一商賣を試みて數萬の金儲け致せしかれ是れ情婦のお蔭とは云へ又偏へに殿様の御恩に候あり」と眞面目に答へければ三枝氏は早くも其意を合點し「さては汝の情婦と云ふは同國の商人にてあらめ汝は江戸表へ着る前に早くも江戸表の商況を探り商戰を試みんとて毎夜彼等を訪ひたるならめ是れ兵法に云ふ聲なきに聞き形なきに見ると云ふものにて商機を探るは如何にも夫程の心得おくては叶ふまじ」とて太く腹を撫せしどなる。

(126)

シヨージ、ムーア

今日の神商
此者流多し

ムーア等は勤儉のは人に取入るの妙を得しものなるが或時「ランカヤ」部にて記述す

機懸 阿部市郎兵衛(二)

談叢家業實

知照 (シヨールダ、ムイア) (二)

「ヤ」に至り、此地有名なる呉服店と取引を求めんとせしに拒絶せられて空しく旅宿に歸へりしは、同宿の商人等は之と聊りて云へる様
 「御身若し彼の呉服店と取引を開き得たらんには、吾等は銘々五磅の金と御身に参らすべし」と云ひしに、ムイアは之と聞きて、大に奮發し、直に衣服を改めて、彼の呉服店に到り主人に面會を求めしに、主人は之と見るや否や、店は本日は早や締め切つたり」と答へ、ムイアと對話するると拒むの色ありけり、されどムイアは尙ほ屈せずして主人の前に進み拙者は御取引の入國に参つた譯には是なく、只兼々御高名の程承はり今度幸ひ御當地に所用のありて、参りたれば此尋でと以て、アッソ十分時間なりと拜謁を願ふて、一つには拙者が生涯の名譽と致し、一つには倫敦に歸へりて拙者の手柄を致したくと存じ、さてこそ參上致し候なり」と、ムイアに御世辭と振舞きながら、無理に主人の室に入りて、種々の離談の時を移しけり、其間主人の視線は屢己れの上衣に注ぎ

談叢家業實

今日の神商
會なムイア
上の所爲と事

を見るや、ムイアは愛ぞと思ひ、「此服の仕立は如何に思召し給ふにやと問ひかけたり、主人の答へけるは「勿論倫敦風の仕立あるべし」と云ふと聞きてムイアは「イカニモ左様に候なり是れは倫敦にても第一の仕立屋に頼み別段に注意して作らしめしものに候ありと云ひけるにぞ、主人は之をツグ」と打眺め頼りに賞賛したりしかばムイアは早く胸に主人が之を所望するを悟り、此服は定めし御身にも適當致をべし幸ひに近頃新調致せしものにて今日始めて着用致したるものにも候へば甚だ失禮には之れあれど若しも御所望にあらせらるゝならば御譲り申すべし拙者は倫敦の者に候へば何時にても新調する事共と易き事に候ありと云ふを聞きて主人は其價を問ひけりムイアは即ち故らに廿五志なりと答へしかば主人は其非常に廉なるを知り之を買はんと約し夫よりムイアは一先つ宿に歸へりて、若更へを爲し再び彼の上衣を携へて主人に差し且つ故らに其代價を受くる事なく貸しとし

談 叢 家 業 實

日本烟草の神代
は煙草の多用
は生利に用多

機 器 ①ジョーシヤムニア(二)

一九〇

て歸へり、直ちに同宿の商人等に告げたり、ムニアは之が爲めに自ら損して上衣を賣りたれども同宿の商人等より約束の賭金を得て、且つ歸來は此奥服店を無二の得意先とせしと云ふ。

(091) 其 二

取入れの策
只是れ耳か

「ニューカッスル、アボンタイン」と云ふ所に大なる奥服屋あり、是れ又新に取引先を増す事を好まざる風なりしが、ムニアは又之れと取引せんと欲し種々に考案を盡したるが、主人は平生スナップを嗜む由を聞き倫敦にて最上等のスナップを買ひ之を携へて其奥服屋に到りたり、然るに果せるか、該店は「本日は最早店を仕舞ひたり」とて應接を拒みけり、時にムニアは其店の番頭に向ひ「余は商用にて來りたるにあらき唯主人に對顔して高話を聞かんとて來りしなり」と云ひければ主人は之を諾して客間に招じけり、其時ムニアは直ちに一本のスナップを把りて之

談 叢 家 業 實

を吸ひ盡し、更に又一本を取りて之を煙ゆらしながら主人に向つて「君も亦た之を嗜むか」と問ひしに主人は其大好物なる由を答へけり、ムニアは即ち其箱を前に進め試みに一本を吸ひ給へど勧めければ主人は一喫して頗ぶる佳品ありと賞しけるに、ムニアは大に喜び「此品は我が家に藏する事多ければ此箱は敢て君に呈せん」と云ひしに、主人は素より好む品あるを以て悦んで之を受け、其日は別に取引の談を爲さず、りしも其後ムニアが訪問せしとき厚き待遇を受け、且つ多くの注文を得て、是より大に取引を開きたりと云ふ。

(128) 市 田 喜 助

人々期早く
起す秘傳

市田喜助 天保年間のは機械の老商なりしが常に江州より東海道の諸國に往來して商ひをなしければ、此間の諸驛に於て喜助の名を知らざるものおかりしと云ふ、其出で、此邊の宿驛に到るや其驛の奥服、太物

談 巖 家 業 實

喜助の天性は
出でしなり
然れども
之れを
手之れ
亦好む
や

横田徳右衛門

一九二

類を商ふ店にては、翌朝より必ら別段に早起し先づ店を開き店前を掃除し、小僧下男の果てまでも慌はて、奔走する程ありしが是は喜助の常に未明より其宿泊せし土地を見廻はり、何れの店が第一番に店張りして、勉強するかと見届け其勉強ある店へは多く商品を送り、不勉強ある店へは更らに送品せざるのみか喜助は其頃東海道筋に有名の老商にて大に信用有しかば喜助と取引する店は、矢張人々の信用厚かりし故、喜助の宿泊せし土地にては斯く早起して喜助の信用を得んと勉めけるにてありけり。喜助は右の如くにして、益、其名を擴め、而して勉強なる店を撰びて取引せし故に、損害を蒙むる事も甚ど少かりしと云ふ。

(125)

横田徳右衛門

一粒の涙
千二百兩

徳右衛門は近江平松村の豪商あるが維新の際許多の浪士俄に其家へ

紙 讀 家 業 實

徳右衛門の退
隠の地は
然るに
公義は
平蔵は
加ふに
ては
門は
くは

其経歴は即ち
其なり

借入し徳右衛門を本陣へ引立て、千五百兩の御用金をぞ命じける。徳右衛門はゆくと泣き涙を拭ひつゝ、某ふと八歳の頃より奉公致し、病氣の爲めに引下がり、廿二歳の折又もや或る油屋へ一口僅か一文目の給金にて奉公に住み込み日に一文目づゝ受けたるものを悉く之を積み、又主用の暇あるときは自分にて商ひを致し、廿四歳の頃漸く七兩三分三厘の元手を得てければ是より風雨寒暑の厭ひなく、一年三百六十日少しも休むとなく、諸方へ旅商ひ致し、艱難辛苦の末漸く今の身分とばかりたれど、是ども皆他より融通致し居るものにて、今千五百兩の御用金も、他にて工面致さば出来ぬ譯にもあらねど、若し左致さんには明日より早最店を開き候事も相叶はせ、妻子眷族を路頭に迷はすのみならず、金主へ對しても義理立たせ、さりとて之を明達致さねば御上へ不忠とやらん之を思へば胸塞がり途方に暮るゝ悲さを少しは御推了下されたし、さうながら某どもも兎に角一店の主人にて候へば、此

横田徳右衛門

一九三

談叢家業實

關東關西の
風俗の異なる
所を見るべし。

櫻 〇某漢學先生

一九四

儘にては相済むまじ、甚と恐れ多きことにはあれど、三百兩程ならば如何にもして調達致さん」と具事慮事打交せて、泣きの涕に迷へければ、浪石の浪士も感じ入り、其方は仲々律義者なりとて、三百兩と受取りて免しけり。徳右衛門即ち家に歸へり、私に云つて曰く、「彼れ浪士原此騒動に乗じて、義理も人情も辨へず、獨りに豪家へ亂入して財寶を掠むと雖も、多くは是れ彼等の腹を肥やすものなり、余れ全く拒絶せんとは思ひしを、虎狼に等しき浪士原のとみれば、如何なる害と爲そやも計り難く、左れば畢竟余れの損なれば、空涙見せて三百兩に直切りしぞ愉快なれ」とて騒動の鎮まると待ち、千三百兩の金と抛つて村民と賑はせしとぞ。

(130) 某漢學先生

キヨガン

或藥種屋の主人曾つて奇應丸と賣らんと欲し、先づ立派なる看板と作り城下に出で、有名なる漢學先生を揮毫と乞ひければ、先生即ち筆と

談叢家業實

僻村に洋字
の看板を掲
ぐるもの、
何ぞ茲に鑑
みざる。

是れ數の小
なるも。

(131) 大倉喜八郎

概れ此
の如し

揮て「きよがん」の三字を大書せり。主人驚きて其故を問へば、先生從容として曰く、「此邊の近在にてはキワウグワンなど、正しく呼ぶ者なく、皆なキヨガンと云ふにあらすや、且つ藥を買ふ者、豈悉く文字を知らん、奇應丸をせよ六かしき文字を認めればとて、之を讀むものなければ、寧ろ看板を掲げざるの勝れるにあらすや」と。

喜八郎始めて江戸に出で、麻布飯倉町の一商家に仕へ、數年にして自ら一商店を開き、乾物鹽物などを商ひ頗る利益を得たり、然れども尙ほ是れ微々たる一貧商にして、人之を知るもの少し。此頃尊王攘夷の論朝野に喧しく人心安からず、天下漸く多事ならんとす、喜八郎即ち豫め軍器兵仗の必要あらん事を慮り、慶應二年の頃八丁堀なる澁谷某に就き、兵器販賣の事を習ひ、其翌年和泉橋通りに一店を開き、銃砲彈藥其他の軍

櫻 〇大倉喜八郎(一)

一九五

實業家叢談

是れ故の大なるもの。

器を販賣す、幾もなくして果して維新の戦亂あり、是に於て其業頗に盛大を極はめ、一朝にして巨萬の利を得、一躍して豪商の列に入れり。喜八郎の機敏なる事、概ね此の如し。

機 靈 ◎大倉喜八郎(二)

一九六

(132) 其 二

ケツト の効用

維新戦亂の際、喜八郎又奥州津輕南に入り、軍旅の間に往來して舶來の毛布を販がんとす。然るに此邊の地、未だ毛布の何者たるを知らず、且つ其價の廉ならざるを以て買ふ者甚だ少し。喜八郎即ち赤毛布を取り、之を二つに折り、其間へ紐を通はして自ら之を衣服の上に蔽ひ出で、其効用を述べて曰く、「是れ舶來の「フランク」と稱するものにして、夜は之を寝具となし、晝は之を敷物とし、又外に出づるに當つては、之を外套とし、之を合羽に代へて、寒を凌ぎ雨雪を防ぐべく、而して其美なる事斯の如し。奥州の如き寒地に於ては、每人必らず一枚を備へて、其便少からざる

實業家叢談

べし。若し此一枚を備へば、寝具敷物雨具の如き、自ら無用とならん。其用亦た大ならずや。況して軍士の如きは、長途の愚戦、山野の露宿に當りて、殊に必要となす。現に西洋にては、兵士に必らず之を備へしむるなり。是に於て之を買ふもの、頗る増加し、爲めに大利を占めたり。或は云ふ我國人のケツトと纏めて外出するの風は、是より始まれり。

(136) 山田新次郎

妙なるかな 商賣の中止

山田新次郎は京都の富商、近江の生れにありて、ありけるが、始め貧賤より起つて東海道筋に旅商し、明治元年より十四年迄細々と資本を積み、最早一廉の富商となりける。折深く時勢の成行を考へ見るに、今ぞ日に月、物價の下落する折あれば、資本を纏めて貯蓄するに若らずとて、其子も、商業を營む時にあらずと警しめ、断然商業を手を引きたりしが、其後果して商業擾亂し、破産閉店するもの、甚だ多かりしにも係はらず、断

機 靈 ◎山田新

一九七

山田新次

一九八

次郎は財産と舉げて、悉く之を堅固に貯へしむば其難と免れたり。新次郎死して後ち當代に至り、機に乗じて善財せし財賣と散じて再び商賣と營みしに其財賣の價格と待ちて大に利益と得たりしとぞ。



嘉言集第四

◎雜部

(61) (60) (59) (58) (57) (56) (55) (54) (53) (52) (51)

艱難は人を賢くすれども富まざめず。

既足の人は荆棘の上を歩行へからず。

注意は能く猫を殺す。

行は實に志て言は葉なり。

家は家あり、常に家らまかせよ。

悪人は已れに分らぬ事を、悉く悪しと思ふ。

過食の喜は哀に變ず。

一生の何物たるを知らざる中に、已に半生を過す。

古きを貴ぶは朋友と葡萄酒と、蕪あり。

貧乏は不和を生じ、又朋友を失ふ。

約束を遅くして、履行を迷にす。

(74) (73) (72) (71) (70) (69) (68) (67) (66) (65) (64) (63) (62)

富は肥料の如し之を積めば臭氣を發し之を散らせば土地を肥す。
 熱する事速ければ冷ゆるも亦速し。
 賊は捕へらるゝを悲みて其賊たるを悲ます。
 虚勢は實利に若かず。
 風雨の日に誓ひたる事は晴穩の日に之を忘る。
 酒入れば智去る。
 實行は諭示よりも教導の効あり。
 客齒は交際を狭む。
 貪慾ある者は常に貧乏なるに等し。
 家産は預り物と思へ已が物と思ふなかれ。
 妻を有せんと欲せば先づ之を養ふの道を知れ。
 幸福は其身を離れ易し。
 目的を定めざる發砲は命中する事なし。

(87) (86) (85) (84) (83) (82) (81) (80) (79) (78) (77) (76) (75)

利益の大なるものは損失も亦大なり。
 懶惰は貧乏の手引。
 自ら富足と稱する者は囊中空乏なり。
 貧しからんよりは寧ろ其身を售れ。
 一桃腐りて百桃損す。
 浪費は鐘の如し家産と身体とを磨損す。
 我れに貧を與う勿れ富を與ふ勿れ只適當の職業を興へよ。
 金を借りに行く者は妻を取りに行くものなり。
 商業上には親戚なく又朋友なし。
 一斤の商業は一斤の黄金なり。
 如何に廉價なるも不用物は高價なり。
 汝の反物に應じて汝の衣服を裁て。
 家産は之を君とすべし之を臣とする勿れ。

(98) (97) (96) (95) (94) (93) (92) (91) (90) (89) (88)

實き人には一言にて足る。
 世の大疑門とは何ぞ曰く「我は如何なる世益を爲し得るか」。
 早く寝て早く起るは健康と富と智慧を得るの法なり。
 今日の一つは明日の二つに償す。
 馬の鐵蹄の釘を失ひたる爲に鐵蹄を失ひ鐵蹄を失ひたる爲に馬
 倒れて馬を失ひ馬を失ひたる爲に騎手は敵に追付れて命を失へ
 り此禍の本を尋ねれば僅に鐵蹄の釘に注意を欠くより起りしなり。
 已れの好む忠僕を得んと欲せば先づ自ら仕へよ。
 金錢の價を知らんと欲せば試に往きて之を人に借れ。
 虚言は借金に乘りて走る。
 萬事に處を定め定めたる處に萬事を守れ。
 改良の餘地は常に存す之を爲すは唯勤勞に依る。
 臺所肥へて藁籠は瘦にけり。

雜門

(134) 木綿問屋大忠

是れぞ我が家の
珍寶にて候なり

明治十七年美術展覽會を京都に開くや府知事市中の名門豪家に諭し
 て秘蔵の珍寶を出品せしむ。木綿問屋大忠舊家を以て名あり其富百
 萬山頭子僧殆ど二百人而して敢て之に應せず。知事再三之を強るに
 及んで大忠乃ち自家に使ふ所の番頭子僧に就きて其年齡体格相均し
 く且つ算筆に熟し事務に通ずる者二十人を撰抜し自ら之を率ひ知事
 に謁して曰く「是れぞ我が家の珍寶にて候なり或くば以て展覽會の事
 務を助けしめよ我が家は商賈なり之を除きて他に診るべきの珍寶と
 てはある事なし閣下若し尙ほ多きを望まば余は多々益之を弁せん
 み」と知事苦笑し而えて心大に其人と爲りを賞す。

談叢家業實

財んして貴ばす
財んして人となす
要財して作るのれ

大忠の心
以て心となす
大忠の心
以て心となす

談叢家業實

之と僥倖と云ひ之と酒難れか樹と云ふ酒の真意を知らん

雜門 ◎榊酒屋の女房

(135) 榊酒屋の女房

家と倒さんとして却つて家を超す

二〇〇

江戸の鎌倉河岸に酒屋あり人呼んで榊酒屋と云ふ殊に白酒を以て聞ゆ毎年三月の節句に際すれば諸藩の家中より市中の細民に至るまで味爽より先を争ふて來り買ふもの蟻の如く集まん混雜々踏宛然一戰場の如く往々死傷者を見るに至る其繁昌思ふべきなり。主人其店の繁昌を極むるに及んで心稍驕り漸く放蕩を事とし復た家事を顧みず遂に産少しく衰ふ産少しく衰ふるに及んで主人の放蕩愈募り其女房百方之を諫むれども聞かず然れども店前の繁昌尙は未だ舊に劣らざるなり。女房心私かに決しりく主人の放蕩斯の如し破産期して待つべきのみ坐して自滅を待つは尋常の事のみ寧ろ今の繁昌なるに際し吾れ亦た主人を助けて家を咄嗟の間に倒し以て世間を驚かすの快なるに如かずと乃ち自ら店丁を指揮し貯る所の酒桶を悉く店頭に残み

談叢家業實

胸に一個穿るふべからざるの職業を習はしめ

榊を倍して之を賣らしむ買ふもの舊に倍す。主人流連遊里にあり之を聞き驚き歸つて家に至れば店前の群集立錐の地なし覺へず手を拍つて快と稱し入つて妻に謝し頓かに行を改めて業を勉む是より其産益裕なり。

(136)

佛國の豪家ギラード

一個の小桶 代金二千圓

一少年あり豪家ギラード氏に雇はれしか二十一年の時主人の前に至り謹んで其年期の終れる事を告ぐ其意蓋し更に一段よき役に用ひられん事を望みてなり主人曰くよし去つて他に行き一の職業を學べと少年曰く余れ永く主公の店に使へ漸く商事に通せり今將た去つて何の職業をか學ぶべきと主人曰く汝の一生中に必らず桶を要する事あるべし往きて桶屋の業を習ひ善き桶を作りなば携へ來つて之を予に示すべしと。少年は其意を解せざるなり然れども唯々命に従ひ

雜門 ◎佛國の豪家ギラード

二〇一

談 叢 家 業 實

窮る後ち之に備万用之
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに
ふるは是れに

輔門 ◎堤惣兵衛

二〇二

往きて桶屋に奉公し、永く算筆を執りし手を以て俄に桶職に従事し、遂に自ら立派なる小桶を作り、携へ往きて之を舊主ギラード氏に示す。氏驚と之を檢めたる後ち、其代金として、少年に二千金を渡して云へるや、「さて今日より改めて汝を我が店に雇ふべし、然れども汝は今後徳たギラードの鼻息を窺ふに反ばず、身に一の職業あれば以て進退の自由を得べきなり」と。

(137) 堤惣兵衛

家に萬金 腕に萬金

堤惣兵衛は近江の家商なり、常に其家人を警めて曰く、「人生の浮沈と商業の盛衰とは敵の免れざる所なり、我が家今巨萬の財を積むと雖も、朝不測の變に遇遭せば、一家離散し親子路頭に迷ふの慘狀に陥るなきを保せず、此時に當り若し腕に一個の職業なくんば、何に由つてか以て糊口の途を得べき、されば汝等今より心掛けて各一藝を嗜むべし」と。

談 叢 家 業 實

何ぞ其用酒のギラード氏に似たる者多きや。

春ふべし、慈は春ふべからざるなり」と、是に於てか商業の餘暇あれば則ち家人を集めて壁の録り方ツタの作り方、竹の割り、漆繩の糊へ様をを教へ、普請の事あれば概ね家人の手を以て之を爲し、以て人夫を雇ふの費を省きけり。現に今堤氏の居室とする所は殆ど家人の手を以て成りしものなりと云ふ。

(138) 高田屋九兵衛

今の世此富家 ありやなしや

高田屋九兵衛は攝州兵庫港の廻船問屋にして、夙に幕府鎖國の制を破り、海外貿易に従事して大利を占めたる達識具眼の家商なりしも、時に逢はねば是非もなや、慶應二年事現はれて召捕られ、松平伯耆守の取調を受け、一切の財産を闕所せられしぞ不道なる。當時の調書に據るに九兵衛の身代は實に非常なるものにて、其概要左の如き見る。

住居 奥行二百七十四間

此建坪二千九百二十五坪

輔門 ◎高田屋九兵衛

二〇三

談 叢 家 業 實

門 ① 錢屋五兵衛

二〇四

家内人数

三千五百〇一人

長家

三百七十一ヶ所

有金

一億八千二十六萬八千五百兩

有米

三百六十二萬二千三百俵

持船 八千石以上

四十八隻

五千石以上

三十三隻

五千石以下

五十二隻

航海中のもの

十餘隻

(189)

錢屋五兵衛

死人の財を數ふ

尙ほ且つ快なり

高田屋九兵衛に先ちて外國貿易に大利を占め、日本貿易商の開祖として固陋商人の膽を今に冷かならしむる彼の錢屋五兵衛、亦嘉永五年事現はれて關所となるや、其財産實に左の如きものあり。

談 叢 家 業 實

門 ① 錢屋五兵衛

二〇五

有金

大判千四百八十五枚 此金七萬四千二百五十兩

小判

二千六百六十六兩

古金

三萬六千六百兩

貳朱金

十六萬五千三百二十二兩

貳分判

五千三百三十兩

天保錢五百三十二貫文

八十三兩

四文錢千六百六十貫文

二百九十九兩餘

藩札七十七貫五百廿匁

千百七拾五兩餘

有米

三萬五千四百石

田地高

八千五百三十石

持船 二千五百石積以上

四艘

千五百石積以上

六艘

八百石積以上

三艘

談叢家業實

遊技も之で
商業に利用
すべし

雜門 ◎伴傳兵衛

小船

十二艘

二〇六

倉庫

八十棟

貸金

二十七萬五千三百兩

(140) 伴傳兵衛

終夜の圍碁
其價幾萬金

伴家は世々傳兵衛と稱す其初代は近江の八幡に住し扇子麻布蚊張張
表の類を商ひ寛永年間江戸に支店を置きしが今に至るまで十二代連
綿として確に祖先の遺業を傳ふ。其二代目傳兵衛は明暦年間の人に
して江戸の支店にありしが常に諸大名の邸に出入し殊に柳川侯の寵
を受ける事深かりき其氣風の質實にして酒器に且も圍碁に巧なるを
以てなり。傳兵衛は曾て大晦日の晩に當り柳川侯の邸に伺候せしに
流石は大名の事とて大晦日の忙しさを知らず徒然の折柄傳兵衛を見
て大に之を喜び直に碁盤を命じてイザ一席と責掛けたり如才なき傳

談叢家業實

事平凡なる
如し凡そ
傳兵衛の
舞の舞の
あはれし
此の舞の
あはれし
らん

兵衛イカデ之を辭すべき命に應じて敵席を戦はせしも思へば今宵は
商家の大晦日元旦の仕度も忙しければソコゝに邊を乞ふと雖も我
儘の柳川侯イカデ之を免すべき大晦日とて何かあらん只明日は元旦
の事なれば松飾りの差圖なきにて少しく多忙ならん开は心配無用な
り明朝汝の歸宅前に家來の者供に申付け必らず立派に立てさすべし
先づ今宵は平坐ぎて夜の明くる迄碁を圍むべし」と終に夜を徹して碁
負を争ひけり明くれば是れ新玉の春の曉傳兵衛は飛ぶが如くに我が
店に歸へり見るに思ひさや其頃江戸市中の商家に絶へて稀なる立派
なる松飾りの門前に立つを見たり傳兵衛大に喜び年改まる今日より
して斯る吉事を見るは實に目出度ことなり商賈繁昌疑ふべからずと
家族一同賑はしく元旦を迎へしがいと珍らしき松飾りの事なれば其
評判忽ち世間に廣がり一入世の信用を重ね商業は日に月に繁榮に赴
きけり。此事例となり明暦元年より慶應年中に至るまで毎年柳川侯

雜門 ◎伴傳兵衛

二〇七

談叢家業實

雑門 ◎魯家の祖先
二〇八
の家臣七八人づゝ來りて、飾りを整へしとぞ、終宵の圍碁、傳兵衛に取
りて其價果して幾萬金。

(141) 魯家の祖先

あの様な人間は金銭の管
理者に通常の者で御坐る

歐洲の金穴、ロスチャイルド家の祖先は、ロエースとて甚と賤き人種
より出でたるものなるが、素と日耳曼に起り名をアムンシエールと呼
びたり。日耳曼の皇帝維廉四世が未だ位に昇らず皇太子として在は
しける時の事なるが、アムンシエールは將棋のお相手を以て太子の殊遇
を蒙りけり、或日例の如くアムンシエールは太子の宮殿に伺候せしに
此時太子は「エストルフ伯と將棋盤に向はせられ其勝負に餘念もなく
一所懸命に盤面を見つめ、頻りに思案の際中にて在はしければ、アムン
シエールは妨げ奉るも恐れありとや思ひけん、ソツ／＼足音を窺みつゝ
遂に太子の後側に立ち止まり、謹んで勝負如何にと窺ひけり。暫くし

談叢家業實

棋盤を
太子の
前に
置く

て太子の方は次第お負色とありければ、太子は少しく、サレ込み後と振
向きて怒るが如く叱るが如く併も助けと借らんとする如き甚と奇妙
なる聲と以て一言「アムンシエール」と仰せられたり、アムンシエールは如才
なく其顔色と見て取り「殿下若し微臣の助言と御求め遊ばせらるゝ、
碁石に候はゞ只此方の王の將棋と堅固に御術遊ばその御覺悟こそ肝心の
候」と答へ奉りしに、太子は此平々凡々たる助言によりて遂に勝利と得
られしかば、其御喜び斜ならず、恰も孤城將に陥らんとするに臨み數萬
の援兵と得たるが如く、アムンシエールと命の親とも思されけん、甚と御
満足の体あて後と振向き「アムンシエール、其方ば如何にも銘人じや、世
界一じや、其方ば實に智者じや、如何にも賢人じや」と非常の御賞詞と賜
はりしぞ、笑止ある。太子は更お仰せらるゝやう「誰れにもせよ、今の如
き九死一生の場合、彼の駒と教ひ勝將棋となど程の者は、商賣にうけ
ても、振目あき人間じや、やうと思ふぞ」と、其後ち太子のエストルフ伯

談叢家業實

の事傳兵衛の
経一、東西

雜門 ◎岡田小八郎

二一〇

語られけるは「アムンニール」は實に當世の銘人で御坐る、普烈大王も劣らぬ銘人で御坐る、あの様な人間は金銭の管理者に適當の者で御坐る。是よりアムンニールは一層太子の御意に叶ひ寵愛一方ならず遂に太子の御世となるに及んで政府の官金とば悉くアムンニールに取扱はせらるゝ、お至りければ其信用俄に擴まり、各國の政府も餘裕の金あれば先づアムンニールに預くるが安心なりと云ふ次第とあり、益融通と廣むる一方に於ては、又各國の帝王が金策となさんとする時は先づアムンニールに借るべしと云ふこととなり、遂にアムンニールは居ながらおして各國の政府帝王と相手として金銭の貸借と爲し、遂に歐洲全體の金融と左右するの勢力と得たりしとぞ。

(142) 岡田平八郎

イザ彼の磨石を
頂戴仕らん

小八郎は近江八幡の商人にして寛永年間に生る、松前屋と稱す、曾て鹿

談叢家業實

中、意表に
出で、先づ
薩摩武士の
腹と控ぐ

商して遠く鹿兒島に至り偶、其得意先なる某武士の邸を訪ひ、甚を圖む約して曰く、藩士負けなば小八郎が望む所の物を與へん、小八郎負けなば金百兩を出さんと、已にして一戦遂に藩士の負となる、藩士頭をなで、笑ひつゝ、我れ負ければ是非もなし、イザ何なりと望みに任せて取らすべしと、云ふを聞きて小八郎は庭前の大石を指し、アレこそ拙者の望む所に候なりと云ひければ、藩士は事の意外なるに驚き、望む品にも程こそあれ、アノ大石は我れの常々愛観して、此庭中第一の飾りとなす所なれど約束なれば遣はすべし、去りながら汝は今旅中の身、アノ大石を如何にせんとするや、ヨモ故郷の江州までは運ぶまじと云へば、小八郎は從容として勿論古郷へ運送致すなりと答ふるを聞きて、藩士も呆れ果て遣は面白しく、直ちに持ち行くべしと責め掛くれば、小八郎謹んで之を謝し、何れ改めて頂戴に罷出でんと云ひすて、馳せ歸りけり。小八郎已に歸へりて後、藩士獨り思へらく、小八郎は豪膽の商人にし

雜門 ◎岡田小八郎

二一一

談叢家業實

約を守りて
再び隙を
士の隙を
く。

求めて而し
は藩士に
の八郎に
は所小八
る以に
買す此に
は求む事
て信じて
なれりも
の愛し得

雜門 ◎諸家の名言

て又約を守るに堅し然れとも素と是れ商人のみ十呂盤を胸に置くも
のなれば無用の石に無用の費を掛けて數百里の故郷まで運ぶ事はヨ
モあらじ明日は必らず我を折りて説を爲し金子にても望み來るべ
とて其夜は臥房に入りけり。翌朝に至れば未朝より門外甚と喧し
藩士驚き起つて之を見れば小八郎數多の人夫を引き連れて門に
主人を見てイヤ御約束の品頂戴仕らんと人夫を指揮して大石を掘起
し即日故郷へ向けて運送せしが今尙は岡田家の庭に其石を存すと云
ふ。是より薩藩の人昔小八郎が豪氣にして約束を守るの篤きを賞し
小八郎は是が爲めに大に薩藩の愛顧を受け信用を博し遂に商機を進
めしとぞ。

(143) 諸家の名家

金儲けの秘傳
如何と問は

富を致すの途如何との間に對し古來諸家の答詞を集むれば實に左の

談叢家業實

致富の途
に來れば皆
ななり。

如きを見るなり。

- (一) 安く買ふて高く賣るのみ。……メヤー、アムッシエー、ロスチャイルド
- (二) 一人の信を得、二に機を見るに敏なるべく、三に果斷勇決なるべし。……錢屋五兵衛
- (三) 正直を守るにあり。……エー、テー、ステウット
- (四) 自家の業務に怠らずして其進歩を謀るにあり然れども其尤も必要なるは、企てたる事若くは企てんとする事の成就するまでは決して他言せざるにあり。……コンモドール、ブアンダービルト
- (五) 節儉と資本を安全なる方法に用ふるにあり。……パツカー
- (六) 忍耐と勉強のみ。……サミュエルバセット
- (七) 汝の造りし物を費さるに在るのみ。……アラゴ
- (八) 志を堅ふするにあり。……ベンチャミン、チスレリー
- (九) 艱難を厭はざるにあり。……マヨロー、マロー

雜門 ◎諸家の名言

談叢家業實

雜門 ◎生瑠沙司

(412) 生瑠沙司

金あり子あり 奇世の大福人

二一四

呂宋の神士に生瑠沙司と云ふ人あり幼より米國に往き留まること七十余年已に陶朱の富を守り亦た彭祖の齡を享く頃日子保を携帶して故國に歸へる其家族一百九十七人而して東宋に担腹するものは此中にあらず。紳士は三妻を娶り元配十一子を生み繼妻は九子を生み三妻は七女を生む孫女三十四人其二十二人は已に他姓に嫁し孫四十五人其三十三人も亦己に早く伉儷を成す。平常奢侈を喜ばず綿衣を着て粗食を喰ふ年九十三にして尙は健康毎日途上に出で、散步する事三四時間毫も疲労の色なし。

(147) 紀文大盡

たは 遊ばぬ

紀文大盡の家名は實に一世を驚かせり。紀文會つて揚言して曰く「我

談叢家業實

紀文の名聲
亦思ふべし

遊戯會は且
つ人の意表
に出づ

れ將に某月某日を以て隅田川に一世一代の豪遊を試みんとす」と江戸市中は勿論近郷近村に至るまで其評判甚だ高く紀文大盡の一世一代の遊びなれば其壯觀思ふべしと期に及び集り來つて之を見るもの隅田川に充満し、舟舫彩艇首尾相銜み來往織るが如し、而して日暮に至るも絶へて紀文大盡の影を見ず。人あり曰く「大盡今正に吉原に流連す而して船に當世の名妓を載せ、今や上流より下り來らんとす」と言未だ訖らざるに忽ち一個の朱航泛々として流に從ひて浮びたり衆人皆、權呼して「紀文大盡來れり、紀文大盡來れり」と呼ぶ、内に又一航あり波のまに、流れ來り、往くが如く、止まるが如く、遂に千百の朱航水を蔽ひて流るゝさま龍田の川の唐錦曲水の宴もかくもやと思はれて、喝采の聲天地に轟く、而して紀文大盡は會つて形を現はさず。後にて聞けば此日紀文は家にありて終日睡臥し、僅かに家僮を遣はして朱航を流さしめしのみなりと云ふ。

雜門 ◎紀文大盡

二一五

談叢家業實

富家の一言
動然として

英蘭銀行
は且つロス
チャイルド
に敵する能
はす。其家
富に於ける
し。

雜門 ◎ロスチャイルド(一)(二)

(146) ロスチャイルド

身代競へこは
さても小癪な

オートルローの金傑ロスチャイルドの其事は略曾つて龍動の一富豪
某家の愛嬢を娶らんとして之を某氏に請ふ某氏自ら其富豪を誇りロ
スチャイルドの財産を危み其資産の高を問ふロスチャイルド從容答
へて曰く「若し余が富と信用とに相應せる待遇を爲さんと欲せば足下
は余に足下の愛嬢を一人も残さず嫁せしむるも尙は足らず」と。

(147) 其二

正金欲しくば
渡しもせうが

ロスチャイルド曾つて英蘭銀行より金を借り期に及んで返へすに英
蘭銀行の紙幣を以てす銀行の役員は正金を以て受取らんと望むロス
チャイルド曰く「よし、然らば先づ此紙幣を正金に引換へよ、而して後
に余は正金を以て返へさん」と役員謝して曰く「嗚呼我が英蘭銀行は遂

談叢家業實

富家の一言
動然として

に足下の敵にあらざるなり」と。

(148) 其三

早く早く余に
金と興へよ

ロスチャイルドは常に曰く「余は臨機應變の人物なり機あれば猶豫せ
ず之を賣り之を買ふ」と又曰く「余は多く智者を見たり然れども彼等
は全き靴すらも着けざりし余は彼等と共に事を謀らず彼等の言は甚
だ理ありて美なりと雖も天運は常に彼等に反對せり」と其死する前數
日客あり氏に云ふて曰く「足下の富は已に其極に達せり余は足下の子
弟が欠くべからざるもの、外は金錢の事に熱心ならざるを望むなり」と
ロスチャイルド直に答へて曰く「然れども余は之を望むかり余は余
の子弟が其全力を盡して熱心ならん事を望むなり是れ幸福を得るの
方法なり大なる富を作らんと欲せば極めて大膽に極めて細心ならざ
るべからず、而して已に富を得たる後は之を守るに尙ほ十倍の智慮を

雜門◎ロスチャイルド(三)

談 叢 家 業 實

死に臨んで
尚ほ金と呼
ぶ。古今未
だ有るの大
難事。

此人にして
始めて此言
を爲し得べ
し。

要す」と而して其將に死せんとするや、天を仰ぎ祈りて曰く、「嗚々嗚々、神は將に余が命を奪はんとす。早く早く、余に金を與へよ」と。

(149)

ダニエル、ドリユー

金を作るにや

學問は入らぬ

牛飼より起つて、一代の間に千三百萬弗の金を作りたる米國の投機大統領ダニエル、ドリユーは、幼少の頃より學問は大嫌ひにて、小學校さへ半途にて止めれば、文字も自分に分る丈にて他人には讀み兼ねる如き筆蹟にて、又言葉遣ひも眞の百姓なりければ、他日巨萬の身代となりたる時に至りても、紳商社會の笑ひ草となりたり、されどドリユーは少しも之を意とせず、金を作るに、何の學問が入るべき。其証據には、斯く云ふ拙者を見られよ」と云ひ、放ち常に學問無用の主義を主張しけり。流石は大膽の言を吐く程ありて、商賣上の事は何異となく心に留め置き、生涯一冊の帳面だに用ふる事なかりき、されば其破産するに當り債主

談 叢 家 業 實

より頻りに責め立てられても、平氣の顔にて「我が方には帳面と云ふものなければ、何程の借財あるか存知不申」と答へしとなん。

(150)

其 二

編笠一蓋とは

眞に此事なり

米國の投機大統領ダニエル、ドリユーが一代に千三百萬の富を作り、一代に又之を一朝の露と消へ失せしめたりと云は、人或はドリユーを以て豪奢の人なりと思はん、然れどもドリユーは相場師には不似合にして、大富限となりても常に幼時に於ける牛飼の粗服を改めず、其穢事一見して嘔吐を催ふす程なりしが、彼は毫も頓着せず、珠玉を飾りたる杖の代はりに、古き破れ傘の柄を握り、揚々として相場市場を奔走せり、其儉約なる事斯の如しと雖も、公衆の爲めに費やしたる金は五百萬の爲めに寄附する所の金は悉く手形を以て渡し、年々其利足を拂ふの

談叢家業實

嗚呼眞に一
個の奇人と
みよふべきの

能く人を用
ひて人を教へ
るなり。

雜門 ◎山中利右衛門

三三〇

み曾つて現金を出したる事なかりければ其破産するや各所の教會、學校、圖書館などは非常の迷惑を蒙りしと云ふ。然れども其身代限りの處分を受くるに當りては實に潔よく人をえて驚かしめたり、驚く其も無理ならず千三百萬と聞へる身代は破産の時に調ぶれば時計と衣服と諸道具と合せて五百三十弗の外更に一物もなく、而して他に隠せし財産とては眞になかりしなり。

(151) 山中利右衛門

法會も亦簡略

山中利右衛門は祖先代々の忌日には、必らず盛大なる法會を營み、番頭丁稚下婢に至るまで本膳を興へて以て口腹の慾を満たしめ、而して僧侶の説教を聞かしむるを以て例とせり、是れ雇人統御の術なりと云ふ。利右衛門は又一の家則を建て、家督權を制限し、先づ山中甲家の主人五ヶ年間家督すれば、乙家の主人又五ヶ年間代つて家督するが如く交

談叢家業實

家を重んじ
て主人の道
徳を又のし
て謀るし。

萬實、勤勉、
儉約、剛毅、
皆是れ關西
商人の美質

々相代は多て家則を亂す事なからしむ、是れ實に主人たるもの、擅一を防ぎ一家を永く泰山の安きに置かんと、の深慮に出でしものなりと云ふ。

(152) 關西十富豪

是れが上方の人物

石橋作太郎 ●丹波氷上郡の人なり、曾つて全村の火災に罹り、村民飢饉に陥る者多きを見て、是れ我が家法を傳ふるの時なりと云、毎朝天明、村内の掃除を爲し終る者には金穀を興へ、爲めに全村をして早起の風を成さしむ。……(德行)

田中源太郎 ●京都の豪商なり、曾つて惡漢に法律を循として、瞞着せられ、遂に節を折つて學ぶ。……(篤實)

土田藤平 ●曾つて哀を乞ふて門に集まる故舊を叱し、其不甲斐なきを罵り、處世の道を諭して、其人の歸へり去らんとするを見て、金を興へて

談叢家業實

雜門 ④四十五家

一一三

業に就かしむ。……(德行)

中井源右衛門 ● 諸國の社寺に參して華表又は繪馬を奉納し、賣藥商江州日野中井源右衛門寄附の文字を書して以て廣告に代ふ。……(機懸)岡崎榮次郎 ● 薩藩の人なり、其父主君島津侯の斬髮せざる間は結髮を解かざるを以て家風となせるにも係はらず、父の死するや直に髮を斬り、日韓貿易店を開き商業俱樂部を設け、電話電燈を新設し頓に舊風を一洗す。……(潤達)

和田ツル ● 大津の富孀なり、其養子を探ふや、先づ燈心に依つて驗す、其之を掻き立て二筋若くは三筋となすが如き者をば直に落第せしむ。……(周到)

大平武助 ● 下婢の米を盗まん事を恐れて米櫃の内部に符牒を描き以て其出入を監す。……(周到)

松井久右衛門 ● 其雇人を旅行せしむるや、必らず其尿するに路傍に於

談叢家業實

てせず田畑に至るべきを戒む。……(周到)

生島嘉藏 ● 米菜魚鹽味噌醬油に至るまで悉く之を己れの居間に陳列し、家人の請求に従つて之を授く。……(周到)

松五郎 ● 神戸に一大金穴あり、人呼んで松五郎と云ふ、金貸しを業とす其貯ふる所の古金銀、新貨幣、數棟の倉底に埋まり、自ら其高を知らず、一女あり之に養子せんとす、先づ試みに近傍の山中に入り、枯柴落葉の類を拾ひ薪に代へしむ、之を爲す事三年にして婚を許さんと而して合格の者あるなし、其女又質素平生綿衣を着し毫も富家令嬢の風なし而して其外に出づるや、美服人を驚かず。……(儉約)

以上は關西第一の富豪と稱びたるにあらす、只其奇行を何吳れまなく瑣録せしのみ。

(153) 某大福長者

錢なき者は人にあらず

某大福長者の曰く、「人は錢あるを以て貴しとなす、錢なきものは人にあ

談叢家業實

味ふべきの

雜門 ◎池田清助

二三四

らず財を貯へんと欲せば暫くも無常を感ずべからず若しも無常を感じ此世をあじきなき者に思はば財を作るの念を失ふべく又之を貯ふるの志自ら消滅すべし此世豈無常を感ずべきものならん苟しくも錢積りて盡きざらんには宴遊聲色を事とせずとも心自ら樂しからんされば人は錢を使はずとも只之を積むを以て最上の愉快なりと心得べし斯くせんには求めずとも錢自ら積らん」と又或大福長者の曰く「人々の錢なきを嘆くは錢を取り得ざるにあらず只豫め之が遣ひ路を考へ然る後に錢を取るが故に常に錢なきを嘆くなり」と。

(154) 池田清助

指一本が 洋銀一枚

池田清助は神戸貿易商の録々たるもの神戸の商人中始めて手代を外國に派遣し又銅器漆器陶器象眼鏡箱の類を輸出せしもの之を始めとす殊に鏡箱屏風の如きは實に清助の發明に係るものにして當時輸出

談叢家業實

萬國は難し
今日と雖も
廿二の神
戸に於て
只第二の
清助なき
の情しむ
のなき

する所年々數十萬を以て數ふと云ふ。其子息を倫敦に遊學せしむるや常に商品を送り其賣上金を以て學費に充てしむるが如きは真に一舉兩得の手段にして子息の之が爲めに實業を経験して得る所ある少からざるべし。始め清助の紀州より出で、神戸にあるや先づ今の元町四丁目に當る旅店越後屋に宿せしが偶々外國軍艦の此地に来るあり水兵の上陸する者は皆な物珍らしげに各戸の内を窺き歩くを見て忽ち思付く事あり僅かの元手にて色々の雜貨を買ひ集め旅宿の店先を借りて之を陳列せしに水兵は争ひ來つて之を買ひけるが言葉も分らぬ事なれば其直段を示すに一朱の積りにて指一本を出せば彼等は銀一弗を拂ひ二本を出せば二弗を置きて去りけるにぞ清助は爲めに存外の利益を得て頓に一廉の身代を作り即ち大に雜貨商を營みけり。

(155) 陸田金兵衛

土より出づる 丸味あるもの

雜門 ◎陸田金兵衛

二二五

談叢家業實

大坂の富商
は之に類
するもの
多し。

陸田金兵衛
の姓名は自
ら土と金に
あふりし
や。

雜門 ◎陸田金兵衛

二二六

陸田金兵衛は大坂の富商なるが、其始め未だ微かなる暮らしをなしける折、曾つて賣卜師に就きて身の上を占なはしめしに、其判断に曰く「庶の上に寶船あり、此寶船西より來ると、斯る象ち封に現はれたり、之を手に入る階梯あれども、例へば九段梯子を用ゆべきに、八段の梯子にて一さわ届き兼ねたり、思ふに御身は土性なり、されば土より出づる丸みある物を商品とせば、時運來りて一段の足らぬ階子を繼ぎ足し、寶の船に届くべしとぞ占ひける。金兵衛は熟々思ふ様、さても土より出で、丸みある物は中々多し、錢は素と土より出づる錢にて作りたるものにて、其形は丸し、さらば兩替屋を創めんか、イナ／＼我は兩替屋を營む程の元手とはなし、さらば丸き火鉢は如何、是ならば古物を少しづつ、買ひ集めて商ふ事を得べし、然なり」と獨り喜びて早速之を始めしに思ひきや、悉く損毛となりけり。金兵衛は尙ほ賣卜者を恨む氣色もなく、再び思案しけるや、「さては我れの誤なりしか、思へば火鉢は皆な丸し

談叢家業實

大坂の富商
は之に類
するもの
多し。

と限りたるものにもあらず、然り土より出で、皆な丸味あるものは米なるべし、然り米屋こそ良らめ、去りるがら是れ又我れの元手あては、逆も及び難し、然り僅かの元手のとにもあれば、少しづつ、米を買ふて之と餅又は飴などに製して商ひたらんには、是れこそ我れの力にて出來べし」と思案して遂に飴屋とぞ始めける。已に飴屋と始めたるは、是れどて掛々しきともなかりしが、去りて金兵衛は尙ほ賣卜師と恨まず、一心に勵みける中、頃には戊辰の際、伏見島羽の戦あり、許多の長州勢は大坂に入込みしが、或日長州の浪士ども見ゆる者、突然と金兵衛方へ來り、明日御城の分取米と入札にて拂下ぐべきに依り、御城まで來るべしとて出で去りける。金兵衛は意外の事に驚きしが、忽ち諭と膝と打ち、彼の賣卜師の言に、寶船西より來るとありしが、此度の騒動は西國の人々より起りしものにて、今我が店に來りし浪士も、皆に西國の人と見受けたり、又米は兼々我の思ふ所なれば、明日の入札こそ急々我が賣

雜門 ◎陸田金兵衛

二二七

實業家叢談

一石の米價
三朱は何
等の相庭ぞ

已に米價を
居て即ち米
所商人の米
所商人の米
所商人の米

商利は幾
格より出づ
格より出づ

雜門 ◎小泉新助

二三八

船が相違なし」と喜び勇んで他に少しの工面と爲し金懐にして翌日城内に至り、大膽にも一石三朱の相庭に入札しけるに、素より浪士の分取米と見て取りたる商人の事あれば、他の人々は夫よりも安く、入札となしたりけん、遂に金兵衛へ落札しけり。金兵衛は乃ち手金と納め、直ち小鴻の池家に賣渡して多分の利益と占めけるが、其後も度々斯る事のありければ、其米にて飴と製しけるに、素より一石三朱の米あれば、飴も安く賣ると得て世間の評判とありしるば、店の繁昌云はん方なく、遂に巨萬の身代とはなりにけり。

(156) 小泉新助

珠飛び 指飛び

小泉新助近江神崎郡は算術に熟達せし人にして、一たび十呂盤と手に取れば、珠飛び指飛び其速なる人目と驚かす程ありしが、常に人に告げて云ひけるやう、商人にして算術に熟せざれば、何業と營むに係は

實業家叢談

加藤理登唯
術の分なら
んや。

守田氏の座
一圓の好話
一圓の好話
一圓の好話

らず商利を見る事粗漏にして常に損毛を免れず」と云ひしとかや。

(157) 某相庭師

古書の中 萬金あり

某相庭師は新瀉の人なり、今は紳商中の錚々を以て推さる、嘗つて人に語つて曰く「余は百戦百敗相庭に云ふ殆ど身を措に所なきに至りしが、偶々市中に出で、古本屋の店頭に神田孝平氏の著されし薄片なる經濟書を見出し家に歸つて之を一讀し豁然として始めて大に悟る所あり、乃ち奮起えて再舉を謀りしに爾來戦へば則ち勝ち、攻むれば即ち破り、以て今日あるを致せり、故に余は右の經濟書を以て余が家の寶典とし、今尙は之を秘藏するなり」と聞くもの其悟りたる要所を問へば即ち答へて曰く「神田氏の經濟書は極めて卑近にして、嘗つて小學生徒の用ひしものなり、君請ふ試みに買ふて之を讀め」と笑ふて而して其故を云はす。

雜門 ◎某相庭師

二二九

談叢家業實

續る鐘屋五兵衛の風あり

二百年前近江桑中村治兵衛己に此言あり

雜門 ◎堀越安平

(158) 堀越安平

店前の塵 庫中の金

二三〇

安政六年堀越安平の他に先ちて始めて支店を横濱に開き外人と貿易を爲すや獨り浪士の惡む所となるのみならず部には賤賤す。又た固陋人の惡む所となれり是に於てか毎朝家々宅前を掃除するにも態と塵芥を安平の店前に堆積するなどの惡戯を爲すものあり安平笑ふて曰く「時勢を知らざる古風の商人は實に氣の毒なるものなり今に見よ商賈の勝利は何れに傾くや數年の後には店前に塵芥の溜る代はりに我家の庫中には金の溜る事あるべし」と果して其言の如し。

(159) 其二

天若し予れ五
年の壽を假さば

安平其子を誡めて曰く「商業は勝敗浮沈多し然るに他人の資金に依頼するが如きは最も危險を累ぬるものなり獨立の商業こそ我が子孫に

談叢家業實

既に此れ時
代人に由
るのみ

年已に八十
向は此言あり
ふし

雜門 ◎堀越安平

望む所なれ」と。又其店の子弟に云つて曰く「我れの始めて江戸に出づるや困窮の餘り代書人たらんと願ひしが筆札と能くせざると以て許されざりき是れ我の奮起して商業志し遂に今日ある所以なり我あして若し當時文章筆札に巧なりしならんには遂に代書人あて終るべかりしものと思へば我れの無學こそ我れの仕合ありしあり。さはさりながら是れ人と時とに由るものなり汝等我が無學と憐れみ商賈の餘暇には務めて書と讀み字と習ふべし」と。安平三十八歳にして志を立て勤儉膽勇機敏德行と以て豪富と致し明治十八年八十の高齡と保ちて病死す其死する前人あり其病と訪ふ安平曰く「予が齡已に八十に及べば年に於て不足はあけれども只残念あるは今の壯者が人に遇ふ每ふ不景氣と嘆き商業の失敗と訴ふるを聞くあり天若し予に五年の齡と假さば予復た率先して業と務め壯者の笑顔と見るべきに返すくも残念の次第なり」と遂に晏然として逝く。

二三一

父君謀り得てはなり。

雜門 ◎伊太利の貴公子

二三二

(160) 伊太利の貴公子

數へる丈け
でも面倒だ

昔し伊太利の都「ヴェニス」に金満の聞へ高き貴族ありけり。其若殿は業より若殿仕立に育てられたるごとて、身に何の藝もなく、只放蕩して錢と使ふが唯一の藝なりけり。されば父君も呆れ果てたれど、禁じたりとて止むべきにもあらずと一策と考へ執事に命じて「以來若殿に金と渡すときは、一々若殿に之と數へしめ、其數へ得るだけ渡さべし」と申付けたり。然るに此若殿は是まで金錢と數へて受取り、數へて仕拂ふと云ふと知らず、只手づらみにて受渡せしとなれば、今更此六のしき規則と實行され、始めの程は錢の名さへ知らざりければ、一文も受取ると能はざりしが、遅く不自由と覺へてより俄に金錢の勘定と習ひ始め、千圓二千圓三千圓と次第に多くの數とも讀み得る様になりしが、爰に不思議なるは、其勘定に漸く熟達するに及びて、俄に放蕩と止め、自ら謹直の人

若殿格り得てはなり。

となり、遂には立派に家督と相續して益々身代と富ましたり。此若殿老後に至り、人に語りて云ひけるは、余は壯年の折、放蕩に心と委ねし際成るべく多く金錢と受取らんと思ひ頻りに數の讀み方と稽古せしが、其事甚だ面倒にして、大數に至る程愈々困却せり、其時余のフト思ひけるは、さて、金錢と數ふる丈けにても、是れ程困難なれば、父君が此金錢と貯へ給ふには、イカ許今の困難にて在はせしやらんと、心付きては始めて金錢の費きと知り、夫より断然放蕩と禁じ、貨殖の念勃然として起たり」と云ひしとなん。

(161) 博士スキイルマン

商人上りの
古物學者

古物學者及び發明者なる博士スキイルマン、或日倫敦の雜貨商社の宴會に招かれ、其席上に於て演説して曰く、「滿場列生の紳士諸君よ、予は貴君が一方あらざる厚意に由つて、斯る尊重なる響應に臨むと得たるの

雜門 ◎博士スキイルマン

二三三

談叢家業實

地位を以て名譽を爲す何ぞ其見の高きや
艱難の状況を知る如し

雜門 博士スギイキマン 一三四
榮に對し、茲に熱心ある感謝と表ると、共に予は其始め雜貨商なりし事、并ふ今此席にありて雜貨營業と賞賛して、諸君が厚意に答ふるは、是れ即ち取りも直さず、予が廿八年間、瞬時も撓もせず、從事したる商賣と自ら賞むるものなること考ふるに及んで、予の胸中は實に限りある愉快と感ずるものなり。予は十二歳となるや否や、「メリレン」州に於ける田舎の小店に入り、雜貨商の丁稚となりて、最初五ヶ年間は珈琲、バター、砂糖、ビール、餅などを半片程づつ賣るものにして、別々のれぞと云ふ纏まりたる取引と云ふものは少しも之れなく、其商賣の甚だ小なりしは、當時予が一日に二磅の賣捌と爲したるとき、今日は大出来なりとて主人が喜び曝きしと見ても知るべく、實に喘々焉として絶へざる系の如しとも云ふべき有様なりし。暫くして予は此の如き名譽多き地位、丁稚店より「アムステルダム」にある或雜貨商會の門番に轉ずることとなりたり。當時予は如何に不遇なる所に墮落したるやと歎きうこと

談叢家業實

榮進して其不幸を恨む何ぞ其見の高きや
勤勉の結果亦大なる哉
其財産益少からんや

たる事もありしが、今日より之を見れば、斯く門番となりたりしは、我身に取りて、大なる仕合の來るべき萌芽なりしところ考へらる。斯くて予は其新らしき地位にありて、二年間幼時に學び置かざりし教育を専務と爲し居る中、不幸にも同じ都會の「ビー、エイチ、スクルーダー」商會の通信者兼計算掛にまで取り用ひられ、二年間熱心其業を執りて、交際にも行き届くだけの注意を用ひけるに、其後該商會は遂に予を以て代人となし、「セントペートルスボルク」に送りて、雜貨を賣らしむる事となれり。其後一年を経、予は自身にて獨立の雜貨商となり、自ら其商賣を始め、十八ヶ年半の間該地に於て營業し、次第に擴張せり。斯く東西に轉々して商業にのみ時間を費したるが如く見ゆれども、予は其間傍ら學問に従事するの閑を偷むを怠らざりし。千八百六十四年三月に至れば、予は己に十數年間貯へたる財産は、餘り多からざるにもせよ、今該營業を止むるも、無論生計には差支なしと考へ付き、且つ予は今後「ホノリック」

談叢家業實

實業に優つて一轉して學問を投ずるに足らず未だ之を我ら未だ

田千金の價あり。

門 博士キーン

二二六

派古物學の研究に従事し得る程の推理的智能をば備ふるものと自信したれば遂に全く該營業を止めて専ら古物學研究に従事する事とはなりぬ。凡そ前後を辨へずして妄りに事を企つる事なく、一事を爲さんとすれば必らず其事物を直接に熱心と忍耐とを以て之に繼ぐは實に必要な事なり。予は斯る良習慣を幼時より千辛萬苦して雜貨商を務めながらに拾集し得たりしが、此習慣は古物學者となりし後も其學研究の爲めに無量の利益ありたる者の如し。故に予が今日此の如き筵宴に招待せらるゝ如き榮譽を受くるを得るも、全く雜貨營業の結果なれば、賤業語るに忍びずと云ふ如き卑劣なる感情より、少年の有様を諸君に告げざるは予の潔白なる心の敢て爲し得る所にあらざり。予が「トロイ」或は「ミニニー」に於ける王家の墓所五ヶ所を見出したる大功も、雜貨商の時に得たる此習慣なかりせば、恐らくは立て難かりしならん。己に述べたる如き譯柄なれば、他の事業を取りて商業と同様に稱せんは

談叢家業實

我國の學者何ぞ此言を無みざる。

少しく貴め過ぎたる事なるべく、商業なくば一の面白き希望大願も起るまじく、一の希望だに起らざりせば、熱心も忍耐も生じ難くして、科學研究などの大事は、中々に覺束なかるべし。斯く論じ來れば、予は爰に商業的思想なき人々は到底何事も爲し得ざるまじと斷言するも敢て過言にあらざると信じて疑はざるなり」と。

(162) 塚本助右衛門

錦を着すば 襦を着らん

塚本助右衛門江州石馬寺の家が其子孫に遺せし文あり、其人と爲りを知るに足るべきを以て爰に掲ぐ。

予壯年の比貧苦に逼り、渡世の爲めに、他國へ赴くとき、以爲らく、故郷へは錦を着て還へると古人も云へり、予も亦思へり、若又之をも叶はずば、寧ろ菰をも被るべし、然れども因念あるにや、あらざるにや、年已に七十も過ぎ八十にも及べども、錦を着るにも至らず、菰を被るにも

談叢家業實

大鐘吟右衛門の如きも、其所に注意し、其心を見らるべし。

雜門 ◎小林吟右衛門

二三八

至らず時に松前へ通ふ商人來りて予に之を求めよと示す何かと見れば蝦夷錦なり即ち求めて之を染め置き予本來空に歸らん時之を着て逝んと欲す。

あへるべき故郷へ錦さもせいで

未來へかへる今日の錦着

(163) 小林吟右衛門

一本の棒銀

四百兩の金

小林吟右衛門部には腰裏の或日妻に晩酌を命じ一盃催せし時膳部の肴一つもなかりしかば何か肴はなさやと問けるに妻は側にて酌を取りつゝ今日は折悪しく肴とは何もあらずと答ふるを聞いて吟右衛門は盃を措き今日臺所にありし棒銀は如何にせしやと再び問へば妻は答へて開は手代共が晝飯の菜にせりと云ひければ吟右衛門は又云はず座敷の障子を開かせて庭の景色を眺めつゝ盃を把つて飲み居れり

談叢家業實

妻と始め家内の女供は老人の折角望まる肴のあきは残念ありとて壹里程も隔りたる所へ下男と走らせ棒銀を買はしめ忙はしく調理して吟右衛門に進むれば道は如何か吟右衛門は暗怒れる顔色みて先刻手代共が晝飯の菜にせしと云ひたる棒銀と何れより持ち來しやと問ひければ妻は笑と含みつゝ折角望まる肴のなかりし故臺所の女供まで本意なく思ひ下男と走らせて漸く只今調理してと云はせも果てず吟右衛門は色と起し老眼鋭く妻と睨まへ此妻は小癩にも何故吾が意と得ずして斯る無益の費へと爲すや依合些細のとなりとも女供が勝手氣儘の振舞となすときは遂に家政と亂そあり不埒な處と叱り散らされ家族一同謝それども徒らに怒と増そのみにて殆ど困じ果て近隣ある親戚に事の由と打明けて供々に謝すれども未だ怒の止まざる折柄手代儀助と云へる者慌しく旅より歸へり來て居合はせし親戚や家人に向ふて告ぐるやう吾れ旅中にて盜賊に出會ひ金子四百兩奪ひ

雜門 ◎小林吟右衛門

二二九

實業家叢談

○小林右衛門

一四〇

取られたり如何はせんといひ悲めば親戚及び家人等は色と失ひ今老人に相談みく一本の棒鱈を買ふて老人に進めしむば勝手氣儘ふ家事と亂すと立腹せられ未だ其怒の止まざるに折も折とて四百兩の金子と奪ひ取られしとは大變なり先づ今夜は密に休み明日老人の立腹もなはつて後又供々に御詫すべしと云ふ聲洩れて吟右衛門の耳にや入りけん儀助が歸へりしとやと聲掛けと突然座敷より出で來し故今は匿しやうもなく家族一同震ひ恐るゝのみ然るに思ひきや吟右衛門は儀助の手と取つて座敷へ入れ棒鱈の爲め怒れる顔と和らげ笑みと催しつゝ久し振にて一盃酌まん」と盃と與へ今陰にて聞けば金子四百兩奪ひ取られし由なるが旅は随分盜賊に出會ふて難詰するともあるものなり取られしものは詮なければ以來は注意して旅せよ」と懇ろに諭せしのみにて更に立腹せず儀助と對酌して四方八方の世間話しふ興じつゝ棒鱈の怒りも消へしむば家族一同喜びしとぞ。

實業家叢談

大なる其の以て其望の將以て知るべき期に近づくべしと

(164) 古河市兵衛

ナヨンマゲと好む

深然と關西より來りて素手巨萬の富を興し世界に二三の地位を争ふ足尾の銅山を其手に握り遂に鐵山王の名を博したるものは實に東京の豪商古河市兵衛なり市兵衛チヨンマゲを親く嘗て云ふ我れ日に五萬圓の収入なくんば誓つて此チヨンマゲを斬らずと後益々暴富を極むるに及びて人あり其前言を果さんことを責む市兵衛チヨンマゲを振つて曰く「マダ少し早う」云々

(164) 大倉喜八郎

好む

當世の紳商多く髯を蓄ふ而して喜八郎獨り髯を蓄へず社中の雇員にして髯を蓄ふるものあれば即ち曰く削つて來ひ其れは明治十一年頃の顔だ」と又曰く「髯があれば老人臭くある人間は老人臭くてはいかぬ

雜門 ○古川市兵衛 大倉喜八郎(一)

二四一

談叢家業實

以て其氣節
し。見るべ

若い氣でドク／＼ヤルべし」と。人或は云、彼の驕を蓄へて、又馬車を用ひざるは他に故あるあり」と。

雜門 ◎大倉喜八郎(二)

二四二

(166) 其 一

我、天皇陛下
の爲めのみ

大倉喜八郎會つて獨乙人の家に發せらる會するもの多くは獨乙人にして或は喜八郎が雇使する所に係り、或は他の病院學校製造所などに備はるゝ所のものなり。席定まりて喜八郎先づ盃をあげて曰く「請ふ共に日本天皇陛下の爲めに萬歳を祝せん」と主客皆私に色を變じ、而して遂に之に和して日本天皇陛下萬歳と呼ぶ社員傍らにあり之を聞きて歸へり、後ち喜八郎に云つて曰く「君獨乙人の會に招がる何ぞ獨乙皇帝陛下の爲めに萬歳を祝せざる」と喜八郎笑ふて曰く「我れ素より之を知る、然れども彼等は日本人に雇はれ日本人の爲めに食す、即ち我が天皇陛下の祿を食むものにあらずや」と。

談叢家業實

清節愛すべ

(167) 金原明善

國民の本分と
盡したるのみ

金原明善は遠江豊田郡中野村の人にして、世々其地の豪族たり、其父夙に勤王の志に篤く、爲めに名を傳ふ維新の後、明善出で、東京に爲換店を開き、又八丈島の物産を販ぐ、會つて海防費を献じて、從五位に叙せらる、明善固く辞して曰く「臣は只亡父の遺志を繼ぐのみ、國民の本分を盡すのみ」と朝廷遂に之を聽して、其亡父へ一口の寶刀を賜はる、明善感泣皇恩を謝す。明善又儉約を以て開ゆ、平生絹布を纏はずして綿衣を着し、表付の下駄を穿かずして麻裏草履を穿く。

(168) 澁澤榮一

英雄能く
英雄を知る

會つて一書生あり澁澤榮一の門を叩く、榮一拒みて之を去らしむ、書生怒つて曰く「余れ今にして澁澤を信するの厚かりしを悔ゆ、彼れ小膽共

雜門 ◎金原明善 ◎澁澤榮一

二四三

談 叢 家 業 實

見ゆる人の
此の明極
しれ此の如

雑門 ◎小谷庄三郎
に語るに足らざるなり」と、即ち去る。榮一之を聞きて思へらく「彼れ大膽
共に語るに足るべし」と、乃ち使を走らして之を迎へ、擧げて銀行事務員
となす。此書生は八巻道成にして仙台の人なり。後ち榮一の借する所と
なり。第一銀行四日市の支店長となり。三重紡績會社の設立に與つて力
あり。榮一の股肱たり。

(169) 小谷庄三郎

通の
功名

小谷庄三郎、江州日野の豪商に、嘗て商用の爲め俄に金二百兩を要
する事ありければ、之を同町の豪商中井源右衛門、五百十二に借らんと
て書面を遣はしけるが、其文中に金子二百兩と認むべきを略して只金
子二〇と記しけるに、源右衛門は早速金二千兩を送りけり。想ふに源
右衛門は二〇を二千兩と解せしなり。庄三郎は早速の承諾を喜びつゝ
取る手遅しと忙はしく調ふれば、已が望みし高に十層倍の金なりけり。

談 叢 家 業 實

源右衛門の
大に

昔時商人の
無邪氣なる
有様と見る
しに足るへ

若しや心急くまゝの數へ違ひにもやと、一度ならず二度までも數へま
かを儲に二千兩ありまかば、道は門違ふと驚きて其過額を返却せん
と思ひまかを否くと思ひ止まり、若し之を返却せば我が度胸の狭き
を示すに似て最と愚なり、今は此儘納め置き、後に至りて返却せまどて
も遅からずと心を定めて其儘納め置き、其後半月程を経て商用も片付
き早速の融通にて多分の儲けもありまかば、欣然と志て源右衛門の家
に至り、毎度ながらの恩義を厚く謝して二千兩を返却し、且つ手紙の聞
違の事なき落ちもかく打明けければ、源右衛門は聞敢へず手を拍つて
大に笑ひ、庄三郎が度量の廣き事精神の淡泊あるを賞讃えて止まざ
りけり。庄三郎も本意を得て笑ひを催ふし、交々談笑に數刻を移して歸
へりまどぞ。斯くて庄三郎は日増に花主の信用を得て、晩年に至り數
多の財寶を造り、祖先累代の本業なる賣藥商を業と志て、近國は云ふも
更なり、奥州仙台へも支店を設けて、豪商の列に入りけり。

談叢家業實

致拜實業家叢談終



明治四十二年一月二日印刷
明治四十二年一月十日發行

(實業家叢談)



編輯者 東京市淺草區北元町十二番地 鈴木源四郎
發行所 同淺草區南元町二十六番地 川崎清三
印刷所 大川屋印刷所

發賣所

東京市淺草區三好町七番地 聚榮堂大川屋書店

(電話下谷一五七三番)



重齋大畑先生著

○陸海 青年祝文演說一萬題 全一冊 ●三十五錢

同 著

○記事 青年作文一萬題 全一冊 ●三十錢

岡本半溪翁著

○草花 盆 栽培法 全一冊 ●三十五錢

同 著

○草花 栽 培 秘 錄 全一冊 ●三十五錢

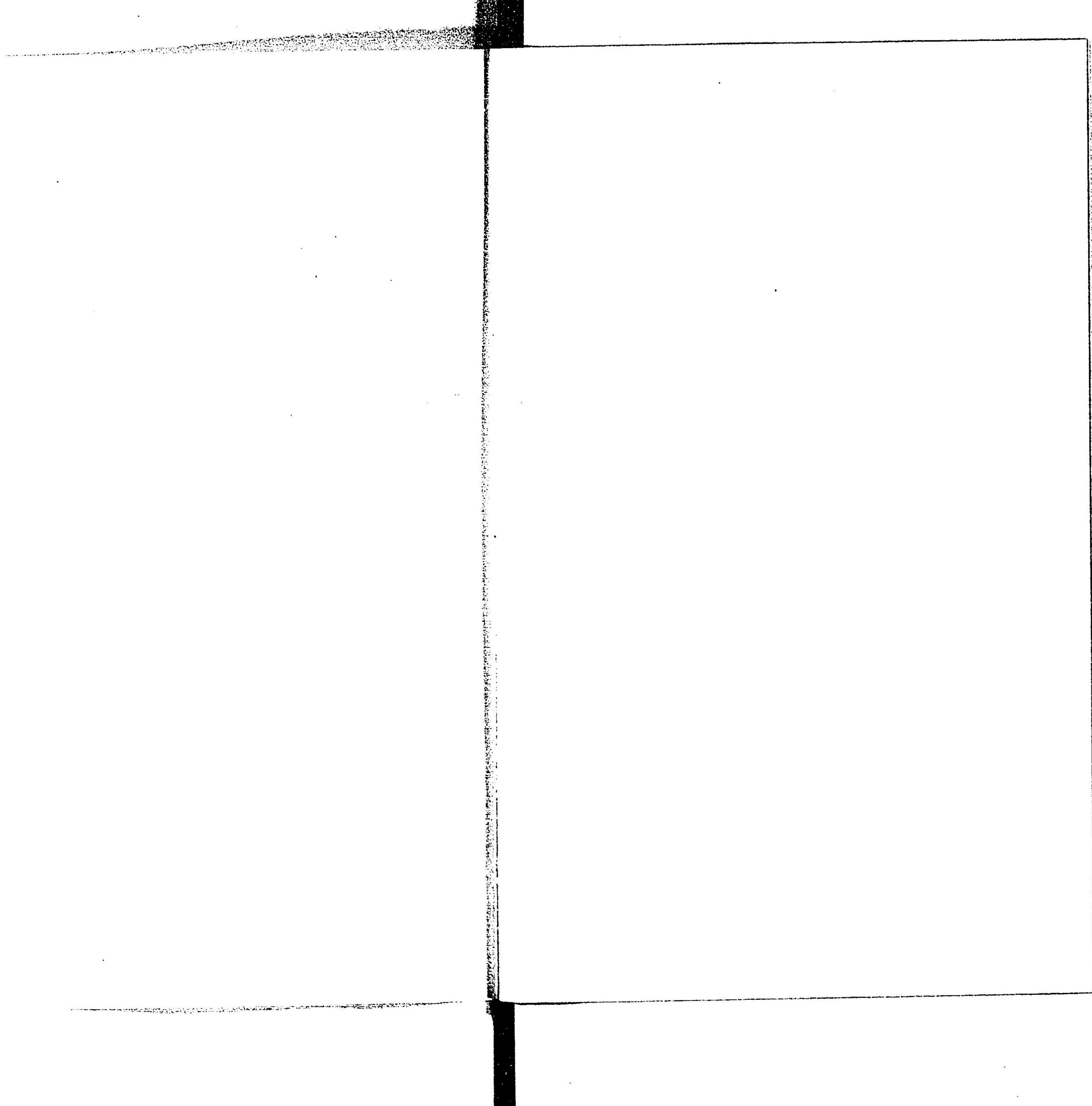
木村文法翁著

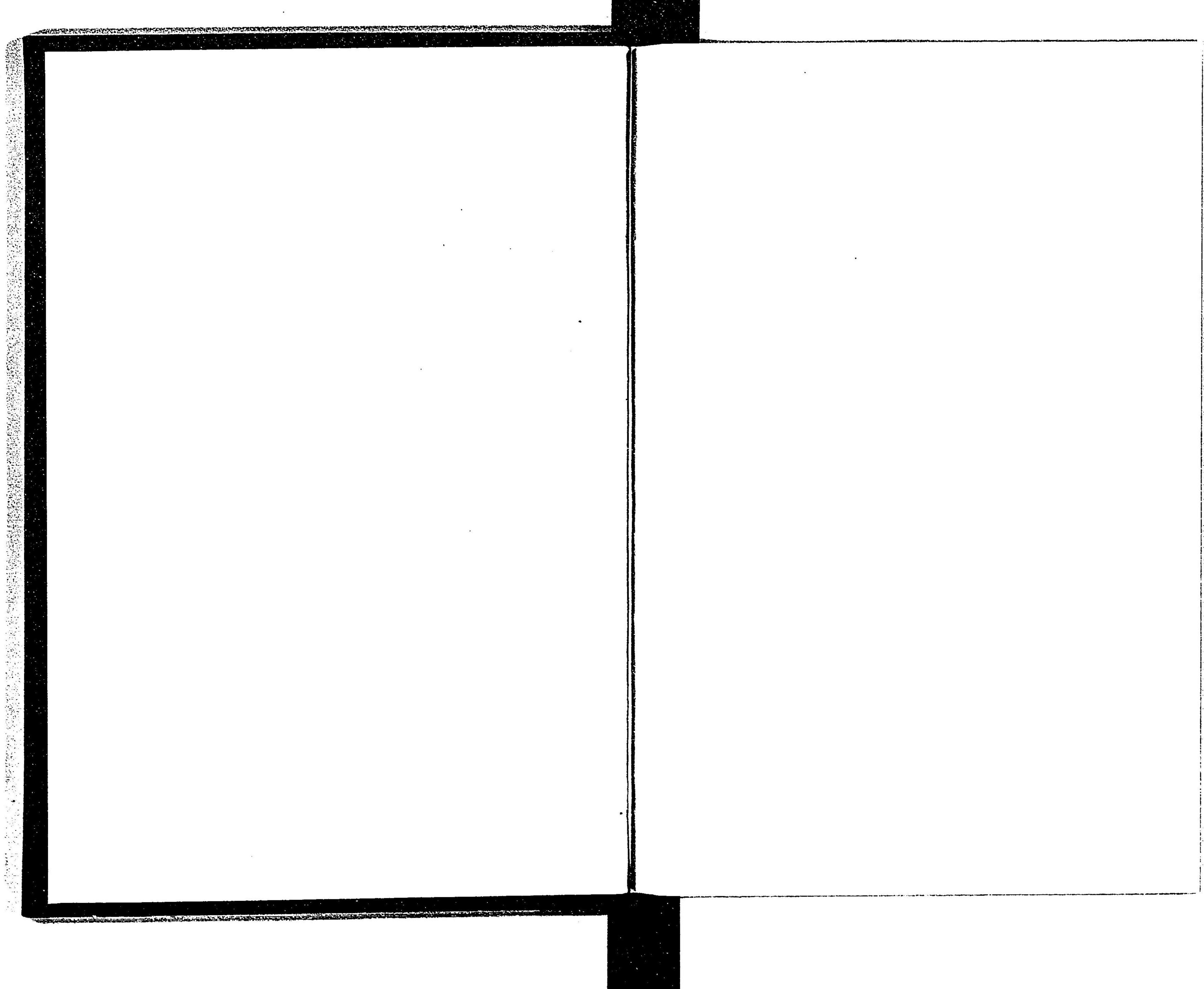
○錄山 庭 作 秘 傳 全一冊 ●三十五錢

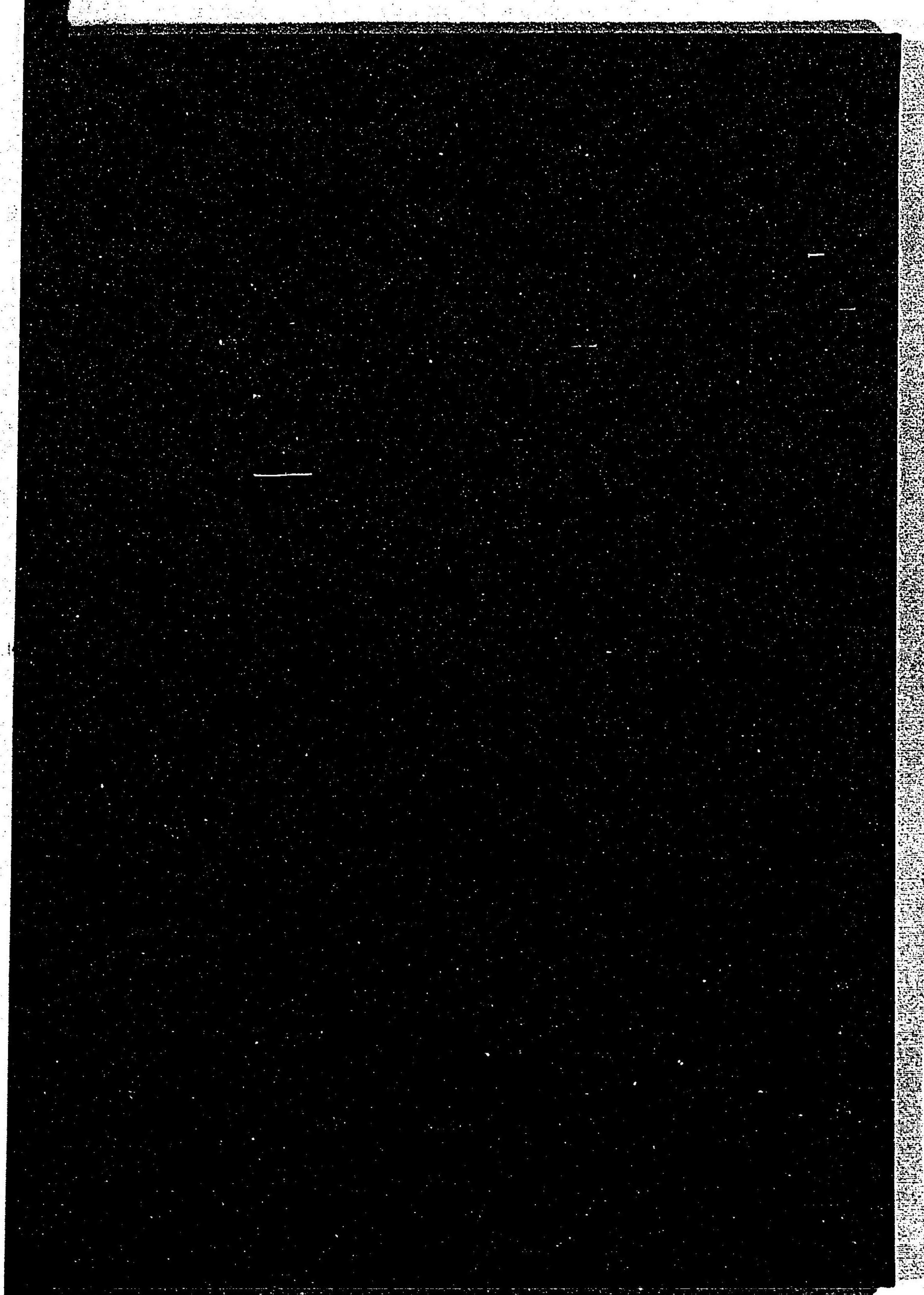


IT 6P16

- 東陽大觀殿之解 日本外史 映入全 七冊 郵稅共 一圓
- 大堀東陽先生訓解 蒙 國史 畧 洋綴全三冊 郵稅共 四十錢
- 青木東江著 繪本 通俗日本外史 全三冊 郵稅共 九十錢
- 青木東江著 平假名入 通俗日本外史 全三冊 郵稅共 九十錢
- 新撰 近世外史 訂正 近刻
- 訂正 繪本 太平記 全三冊 郵稅共 一圓十錢
- 繪本 重修真書 太閤記 字金入 大本全一冊 郵稅共 一圓四十錢
- 繪本 太閤記 全三冊 郵稅共 一圓
- 繪本 真田三代記 全二冊 郵稅共 七十錢
- 通俗繪本 三國志 全四冊 郵稅共 一圓五十錢
- 南總里見八犬傳 映入全 八冊 郵稅共 一圓五十錢







64
60

004502-000-5

64-60

実業家叢談

天城 安政 / 著

M42

ACE-1043



